ボランティアから地域復興支援員へ、三ヶ地区と歩んだ 10 年

Decade with Residents in the Sanga District from as Volunteer to as Rural Area Supporter

佐野　玲子
SANO Reiko

1. 三ヶ地区との出会い　中越地震から 3 日目、長岡市社会福祉協議会災害ボランティアセンター登録後、山古志班として配属された避難所が、三ヶ地区住民との出会いの始まりだった。高齢者から幼児までいた避難所生活の中で、被災者のどこへぶつけていいのかわからない辛さや失望感を耳にしながら、不便な避難所生活を乗り切るためにも、さまざまなニーズを受けできる限り被災者と向き合い、少しずつ住民との距離を縮めていった。

避難所生活から、ようやくプライベートが確保できる仮設住宅へと移ったのが 2 か月後の 12 月下旬だった。仮設住宅で最初に行動したのが、1 件ずつの安否確認の戸別訪問とそれに付随する声掛けだった。住民たちにとって慣れない仮設住宅は不安でいっぱいの毎日である。『困ったことがあったらいつでも連絡してね』と付け加えた。“安心して暮らせる環境をつくること”それが私たちの大きな役目だった。平成 17 年 4 月より私は、新潟県社会福祉協議会の中越大震災復興基金より生活支援相談員に籍を置き活動を始めていた。個別支援を積極的に行い住民に相談されたことは必ず持ち帰り、行政や関係機関への橋渡しをしながら生活の問題点を共有することを心がけていた。三ヶ地区の仮設集会所では、定期的に住民のお茶会が開催され私も必ず参加していた。テーマのないお茶会は、山古志の生活話、行事の話、孫の話など、お盆近くになれば懐かしい山古志の盆踊りが集会所の中で始まったこともある。仮設での生活支援相談員をしながら、住民との距離関係がまた少し近づいたように感じた。三ヶ地区の避難解除は山古志地域の中でも一番遅く、平成 19 年 12 月、ようやく 3 年間の仮設生活が終わり大好きな山古志へと帰村したのだ。

2. 帰村してから　帰村してからの住民は、3 年間の空白を取り戻すかのように生活基盤や集落を整えようと無我夢中だった。平成 20 年 4 月、これまでの生活支援相談員から現在の、（公財）山の暮らし再生機構へ籍を移し地域復興支援員として活動を始めた。この時点では、まだ山古志地域全体を支援することよりも、集落単位のコミュニティー再生を支援するのが優先だった。特に三ヶ地区の帰村は、震災前に比べ半数以下に減少したうえに、高齢化問題も出てきた。少ないながらも住民は、それぞれの再建した集落センターで定期的にお茶のみを行い、今後のコミュニティー再生に対する自分たちの想いを深めていったように感じる。ある日、大久保集落のお茶のみに参加した時、昔の盆踊りの話になり、今は存続が不可能な気持ちを抑えながら『懐かしいね』とおばあちゃんがつぶやいた。この時、“何とかして復活させてあげたい”という思いから、毎年行われている「三ヶ合同盆踊り」と「三ヶ合同さいの神」にたどり着いたのである。茶飲み話のつぶやきから始まった企画は、開催するまでさまざまな問題にぶつかった。集落合併が困難なように、集落が持つ個性の差異や歴史的な要因が考えられた。以前から合同を考えていた池谷集落前区長、ぜひ参加させてほしいという大久保集落、集落の伝統行事は自分たちで行いたいという楢木集落。何度も会合を繰り返し、高齢化が進む今後 5 年後、10 年後、自分たちの集落伝統行事

公益財団法人 山の暮らし再生機構 長岡地域復興支援センター 山古志サテライト　*Life in Motherland*
キーワード：地域復興支援員、コミュニティー再生、三ヶ地区

は続けていけるのか、さらに、公民館活動を行っている池谷分館の若手に運営体制を切り替えることで、「さいの神の作り方」や「盆踊りの音頭取りや太鼓のばちさばき」など、若手の養成につなげることで三ヶ地区は新しい地区行事として継続できるのではないかと自分の思いを聞いてもらった。賛否両論あるなかで、手を挙げてくれた池谷分館長に行事運営の世代交代が行われ、平成 23 年第 1 回目の合同さいの神が楢木集落で行われ、その年の 8 月には第 1 回目の合同盆踊りの開催、その後は、毎年行われる行事として世代交代した若手は企画、準備に動き回っている。また、これまで運営に携わっていた集落の役員たちも、伝統の担い手として、これから三ヶ地区のコミュニティー再生を考える若手としての活動を見守っている。昭和 50 年に三ヶ出身の校友会が東京で発足され、平成 11 年まで「民謡の夕べ」を旧池谷小学校で行っていた。その後、池谷小学校は廃校となり継続が途絶えてしまう。そんな昔の想いから、校友会会長へ合同盆踊りの話を持ちかけ、平成 24 年、25 年の合同盆踊りに約 60 名の会員が駆けつけてくれ、会場は大いに盛り上がった。

池谷集落の経済効果をもたらしているのは、池谷直売所と言える。高齢者の健康管理を考慮しながら、耕作の楽しみや収穫物の喜び、そして、直売所に買いに来てくれる来訪者とのコミュニケーションだ。震災前は、30 名以上の仲間で野菜作りを行っていたが、震災後には、大幅に減少しその後、「古志の会」の発足で楢木集落も加わり運営にあたっている。その楢木集落のお茶のみでも、『直売所をやってみないか』と声をかけたことがある。当時は、池谷直売所に気を遣い自分たちだけでの運営に身を引いた。その頃、地域内のイベントで来訪者向けに、『三ヶ地区合同で野菜の直売所を出さないか』という声がかかった。絶好のチャンスと思い、さっそく楢木集落へ話を持ちかけ、池谷直売所の運営方法などを教えてもらいながらそのイベント会場で初売りを行った。大久保集落は、住民の減少と高齢化が重なり野菜こそ出せなかったが、現在の区長が自宅で育成している錦鯉と金魚（たまさば）を販売した。この近隣集落間のコミュニティーは、これまでの長い関わりのなかで蓄積されてきた、わだかまりや集落個性の差異を飛び越えた『協働』という共通認識がすでにできているからこそと感じる。三ヶ地区でもう一つ、仮設集会所から継続して行っている行事がある。「ふさんこって会」と言い、3 集落合同のお茶のみ会だ。「ふさんこって」とは、山古志で使われている「久しぶり」という方言。地域外へ転居した住民と地域内の住民が集まって年に一回、情報交換を行い親睦を深めている。会場は、ほぼ地域内で行い転居した住民たちは声を掛け合いながら車で来てくれる。最近では、男性の参加者も増え、談話のなかに集落の壁を越えたコミュニティーが見て取れる。こうした近隣集落間の合意には、どうしても第 3 者の仲介が必要となる。合意に対して地区の一人が言い出したとしても、他の住民からの批判は免れないだろう。

<u>3. おわりに</u>　よそ者の私が、合同を持ちかけ、直売所の参加を呼びかけ、ふさんこって会を開催できることは、3 集落の住民と避難所から 10 年間のお付き合いがあり、信頼関係を認めてくれた住民のみなさんが一歩引いた姿勢を取ってくれたことで、今があるのだと思う。この集落間をつなぐコミュニティーは、展開初期段階と言える。今後、ますます高齢化が進む三ヶ地区にとって、ひとり一人の意思で支えあう協働集落づくりを目指してほしい。三ヶだけにとらわれず、山古志地域全体からの目線で見つめなおすことが必要だと思う。単独で終わらせてしまう『集落完結型』から周りの集落を巻き込みながらの『近隣協働型』への意思転換が必要ではないかと感じる。